

天文民俗調査報告(2011年)

北尾 浩一*

概要

2010年に引き続いて2011年においても、日々の暮らしのなかで形成された日本古来の伝統的な星名を記録することができた。特に、従来十分に調査が行なわれなかった奄美大島及び五島列島の調査を行ない、次のような成果を得ることができた。

- ・五島列島においても星の出をイカ釣りの目標にしていたことが明らかになった。
- ・プレアデス星団について、奄美においても七つ星のグループに属する星名が伝えられていたことが明らかになった。
- ・野尻抱影氏著『日本星名辞典』等に掲載されていない新たな星名を記録することができた。

本報告の目的は、決して過去のものではなく、今も語られている2011年の星名伝承資料を、科学教育に活用するために記録することである。

1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめてから34年目になった。調査を実施した地域は、「関東」「東海」「中国」「九州(奄美、五島列島)」である。「北海道」「東北」「甲信越」「北陸」「近畿」「四国」「沖縄」の地域は、実施することができなかった。

なお、奄美と五島列島の調査は、財団法人日本科学協会より笹川科学研究助成を受けて実施したものである。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和10年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の話者は明治44年生まれ、最も若い話者は昭和27年生まれであった。2010年と同様、予めアポイントを取るという方法ではなく、調査地において伝承者を探した。一日歩いて星名伝承を記録できないケースが年々増えていくが、ともかく「歩く」ということをキーワードに実施した。また、星名伝承以外に、年中行事(七夕等)についても調査対象とした。

2-2. 調査地

2011年1月～12月までに、以下の25箇所で見学星名の記録を行なうことができた。

- ・1月…三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島
- ・2月…愛知県西尾市一色町治明
- ・3月…山口県宇部市床波、東岐波
- ・4月…愛知県知多郡南知多町大井
- ・6月…鹿児島県奄美市住用町市、名瀬小湊、笠利町笠利、喜瀬、大島郡瀬戸内町古仁屋、西古見、芝、諸鈍、長崎県南松浦郡新上五島町奈良尾郷、日島郷、有福郷、桐古里郷横瀬
- ・7月…長崎県五島市奈留町浦、泊東風泊、口ノ夏井、船廻矢神、大串夏井
- ・9月…千葉県勝浦市串浜、松部、安房郡鋸南町竜島、

3. 各地域の星名伝承

2011年に各地域で記録した星名伝承の概要は、以下のとおりである。

3-1. 関東

千葉県勝浦市松部、安房郡鋸南町竜島において、次のような星名伝承を記録した。

(1) 勝浦市松部

メラボシ(カノーブス)について、「布良の者がなんか…」と記憶をたどろうとしたが、見た経験はなく、どのよう

*中之島科学研究所(科学教育)
kitao@kagaku-shinko.org

な星かは不明であった。(話者生年、昭和5年)

(2) 安房郡鋸南町竜島

アジ釣りのときの目標にしていたケースを記録した。「時計持って行っても、星のあがるので何時だ。時計だけでなく、あの星あがったから何時頃だな。あの星があがった、次の漁にかかるか。今まであまり釣れなかったけど、あの星あがるとよく釣れるから。サンボシ、あの星あがったら何時かな、きのうはあの星出る頃、釣れはじめたからうまくいったらきょうも。いままで釣れなかったけれど、これから釣れてくる。サンボシ出るとアジが釣れるときあるからがんばる。昨日はサンボシの出る頃釣れた」(話者生年、大正9年)

3-2. 東海

愛知県、三重県において、次のような星名伝承を記録した。

(1) 愛知県西尾市一色町治明

大正2年生まれのお父さんから、スバル(プレアデス星団)のことを「おすわりさん」と言ったと伝え聞いていた。「おすわりさん」の意味はわからなかった。(話者生年、昭和18年)

(2) 三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島

年寄りから、「ミツボシ、覚えとけよ」「たてにぼんぼんと3つならんでる。横じゃない」と伝え聞いていた。(話者生年、昭和12年)

3-3. 中国

山口県宇部市において、次のような星名伝承を記録した。

(1) 宇部市東岐波

短期間だったが、明治33年生まれのお父さんと船に乗った。夏から秋にかけてのオリオン座三つ星の思い出である。

「ミツボシあがると夜明け近いーと、父親が言ったのを覚えているが、目標にしたことはなかった」(話者生年、昭和18年)

(2) 宇部市床波

ネノホシ(北極星)を目標にしていた時期を、「昭和12年頃迄」と具体的に伝えていたケースである。「ネノホシ、電球で方角、いる場所がわかる。ネノホシは、こっちが移動してもついてくる。ネノホシ、子、丑の子。北。昭和12年まではネノホシを相手」

また、明けの明星を、「アサノイチバンボシ」と呼んでいた。一般的には、宵の明星を意味する一番星が明けの明星の名前となっていた。(話者生年、大正13年)

3-4. 五島列島

長崎県五島市奈留町と南松浦郡新上五島町の調査を実施した。

(1) 五島市奈留町浦

小学校3、4年の頃、明治20年頃生まれの曾祖父さんから次のように伝え聞いていた

「スバルってきりごとした星出る」(「きりごと」とは「あめきり」という意味)」(話者生年、昭和27年)

(2) 五島市奈留町泊東風泊

スバリ(プレアデス星団)の出をアジ、サバ、イカの漁の目標にした。

「スバリ出たら、とれた。時間をはかった。スバリ、何時出る。アジ、サバ、イカ、とれよった。スバリ出た、魚とれる。寝てる、スバリの出まで。曇っても、スバリの出の頃、起きる」(話者生年、大正14年)

(3) 五島市奈留町船廻矢神

星をイカ漁と気象予知の目標にしていた。

・イカ漁の目標

スバリ(プレアデス星団)とオオボシ(明けの明星)の出をイカ漁の目標にしていた。

「イカが進む。イカがとれる。スバリの出、オオボシの出、イカが進む。いま、スバリの出かな、オオボシの出かな、よく釣れる、進む。曇ってて、空も見えないでも勘で判断。スバリの出、オオボシの出、時間さえわかれば、曇ってても釣れる。潮変わるかもしれない。曇りでも晴れててもイカが進む。小さか、北斗七星の形。スバリの出、オオボシの出。小さい舟、寝られない、しんぼうして、スバリの出までたまに釣れるイカとって」

「スバリの出るときに釣れる。山から出るときではない。今頃、午前2時か3時に山から出る。スバリ沈むとき関係ない。スバリの出るときイカ進む。必ず進むわけでない。先輩たちの経験から判断」

「スバリの出のあと、進まなくなるときも、続くときもある。スバリの出に釣れないときもある。漁とはそんなもの」

・気象予知

11月頃から西にスバリが沈む時はオトシ(突風)が吹くので用心して帰った。

「スバリの入りやから、オトシがくるけん、用心せんばってん。オトシ、突風。秋から冬。油断せずに帰る。釣れていても、無理して残らない」(話者生年、昭和3年)

(4) 五島市奈留町大串夏井

星の出は、イカ漁の目標とはならなかった。次のように月を目標にした。

「星の出、入りはあんまり関係ない。アオリイカ、ミズイカ、とりにいく。月の出、入り、イカ進むときもあるばってん」(話者生年、昭和3年)

(5) 五島市奈留町泊口ノ夏井

スバリ(プレアデス星団)等の星や月の出、入りを漁の目標にしなかった。次のように、星を用いて時間を知った。

「スバリの出、入り、イカ、魚関係ない。星の出、入り関係ない。月の出、入り、イカ、魚、関係ない」

「スバリって、星の数が10個くらいおって。スバリが何時のぼるとか。スバリ出たら、のぼったけん何時くらいに、1時とか2時とか。日にちによって、出る時間がちがって」(話者生年、昭和5年)

(6)新上五島町日島郷

北斗七星のみ学校で習ったが、スバル(プレアデス星団)、オオボシ(明けの明星)、ニシヒカリ(宵の明星)、キタノホシ(こぐま座 α 星(北極星))は、年上の漁師より伝承の形態で習得した。

・時間の目標

スバルや、オオボシを目標に使用した。

「スバル、東に出た。スバル出たから、漁に出ていく、と言う。スバル、夜明け。スバル、7つ小さい星。道具のスバルとは関係ない」

「ヨアケノミョージョーを、オオボシと言った。オオボシ出たから沖に行こうとか」

・方角の目標

キタノホシを目標にした。

「キタノホシ、北極星見て、漁に沖に行って。曇ってキタノホシ見えないときは沖に行かない」

・気象予知

「星がべったりしたら天気。時化のとき、星がきらきら」(話者生年、昭和7年)

(7)新上五島町有福郷

スバル(プレアデス星団)をイカ漁と気象予知の目標にしていた。

・星の出、入りと漁

目標としてスバルを用いたが、ヨコゼキ(オリオン座三つ星と小三つ星と η 星)は使用しなかった。また、曇天・雨天であっても、スバルの出、入りには漁があった。

「スバル、東から出るとき、漁がある。イカでも何でも。アジ、サバも。ケンサキイカ、秋まで、スバルの出に釣れる」

「スバル入(い)るとき、オトシのこないときは、漁がある。ヨコゼキは、漁は関係ない。曇っているとき、夜、星が見えなくても、スバルの出は魚が釣れる。目覚ましを、スバルの出る10分前くらいにいれて、寝る。10分前に起きる」

「曇っていても、スバルの出るときには釣れる。曇っていても、雨でも、スバルの出、入りは漁がある。イカ、アジ、サバ」

・方角の目標

北極星(こぐま座 α 星)のことをネボシ(子星)と呼んだ。

「ネボシ、動かない。ネボシ、方向わかる。イカリ入れて、ネボシ見ている。昔は、羅針盤なかった。ネボシ見て、何度で走ったら目的地へ。ネボシ見て」

・気象予知

スバルの入りをオトシ(突風)を知る目標にした。

「スバルが入(い)るときにオトシがという。風向き、西。朝に近い。スバルが水平線に沈むとき、絶対にニシの突風、オトシがくる。体で経験した。年寄りから聞いた」

「2月の上旬くらいまで、この星が入るとき突風が来る。昔は、突風のことを、『オトシ』と言った」(話者生年、昭和7年)

(8)新上五島町桐古里郷横瀬

明治20年、30年代生まれの先輩から次のような星名伝承を伝え聞いていた。

・時間の目標

スバル(プレアデス星団)とオオボシ(明けの明星)を目標として使用していた。ヨコゼキは、この場合、オリオン座三つ星と小三つ星ではなく、北斗七星を意味した。

「スバルというと、かたまっとったんじゃな。スバル九つ、ヨコゼキは七つ。スバル、ひし形、◇に9つ星が。船に時計なかった。スバルで時間」

「オオボシ、夜明け前。ひとつ大きい、オオボシ出たら夜明け」

「横瀬、イカとりだった。ミズイカは、この前でとれた。マツイカ、マイカ、ソデイカは沖。オオボシあがったら仕事が終わりでた。オオボシ出たら、何時とか。星で時間を知りよった」

・方角の目標

方角の目標として使用した北極星をキタノネノホシ、キタノネノヒツボシと呼んでいた。

「キタノネノホシって、言いよった。ひとつ大きかった。光が大きかった。キタノネノホシ、動かない。キタノネノヒツボシ」

・気象予知

スバルの入りは、オトシ(突風)が吹くので帰る準備をした。

「スバルの入(い)りから西の風のオトシ。スバルの入り、西の風。西のオトシカゼ。オトシカゼ、急に吹く風。突風。スバルの入。旧11月、12月、正月、2月。オトシカゼ。スバル入り、ニシの風。帰る準備をした。スバルの入、突風、あたる」

・星、月の出、入りと漁

星ではなく、月を目標にしていた。

「星の出、入り、イカ、魚、釣れない。関係ない」

「月の出たとき、イカ、アジ、つきよった。月の出、イカ、漁ある。月の入り、関係ない。月上がっても、イカよかった。月がない闇夜は集魚灯。カーバイド。もっと前、明治40年から37、38年は薪をたいて集魚灯にしたと聞いているが体験したことはない。月があるときは月が集魚灯」(話者生年、明治44年)

3-5. 奄美

奄美市、大島郡瀬戸内町の調査を実施した。五島列島と異なり、星の出を漁の目標とした事例を記録することができなかった。

(1) 奄美市笠利町笠利

学校では星のことを聞かなかった。年寄りからボレフシ、ツガフシ等を伝え聞いていた。

・ボレフシ(プレアデス星団)

「ボレフシ。ボレ、固まる。ボレフシ、固まっている、群れている。年寄りより聞いた」

・ツガフシ(オリオン座三つ星と小三つ星とη星)

「夜釣り行った。柵みたいな形、ツガフシ。こう出たら夜が明ける。井戸にあるような柵みたいな。ツガフシ、東から出て西の方に沈む。北斗七星とちがう。夏、夜釣り。ツガフシ、夏、夜が明けてくる。鯛の一種のクツナギは夏にとれる。今いない」(話者生年、昭和5年)

(2) 奄美市名瀬小湊

星を時間や漁、気象予知の目標とはしなかったが、ナナツブシ、イコブシ、ユアボシ、ホーキブシ等の星名を伝えていた。

・ナナツブシ(プレアデス星団)

群れ星ではなく、ナナツブシ(七つ星)が伝えられていた。

「ナナツブシ、夜中に見える。小さい星が7つ。ブリブシとは言わない」

「ナナツブシ、夜明ける前、東にあがる。ナナツブシは、ユアブシあがる前にあがる」

・イコブシ(おおぐま座αβγ)

杓(てんびん棒)に見立てたのは、さそり座アンタレスとστではなく、おおぐま座αβγであった。

「昔は天秤のことをイコ(杓(おうご)の転訛)と言った。Λな形。イコブシ、北の空。北斗七星は、イコブシのこと。北斗七星と言わない」

・ユアブシ、ユーアブシ(明けの明星)

「ユアブシ、大きい星。ユアは夜明けという意味。ヨアケブシをユアブシという。ユアブシ、ユーアブシ、夜明け。昔から言う」

・七夕

7月6日に七夕の飾りをつけて、7月7日朝早く竹をたてた。次のような伝承が伝えられていた。

「七夕おとす雨がふる。短冊等が落ちる。必ず降る」
「七夕蒔き。七夕にダイコンの種を蒔けば、薬になる。万病の薬」(話者生年、昭和5年)

(3) 奄美市住用町市

ナナツブシは、名瀬小湊ではプレアデス星団であったが、住用町市では北斗七星を意味した

・ブリブシ(プレアデス星団)

「ブリブシ、星が固まっている」

・ナナツブシ(北斗七星)

「ナナツブシ。水のむ杓文字みたいになってる。北斗七星」

・オヤブシ(親星)(明けの明星)

「朝出る大きな星。オヤブシ。大きい、親。太陽あがる前、釣れる。オヤブシ見える」(話者生年、昭和5年)

(4) 瀬戸内町古仁屋

ブリフシについて、話者は、最初は、「6個」と言ったが、「7、8個」と訂正した。

・ブリフシ(プレアデス星団)

「ブリフシとか。星さ、固まってるわい。じきじきによって朝あがってくることもある。ブリフシは、学校でなく、古仁屋の年寄りから聞く。ブリフシ、沖縄の人も言っていた。6個、ブリフシ。ばらばらでなくて6個固まってあがってくる。ブリフシ、7、8個」

「真角(まかく)にしっぽみみたいなのついている」

「固まりをブリ。ブリフシ、出たとき入ったとき、魚関係ない。気象、天気、風も関係ない。ブリブシあがったら何時。だいたいわかる」

「天ヌブリブシハ、ヨミモナル。オヤノユガゴトハ、ヨミハナラヌ」(天のブリブシは数えられるが、親が教えることは多いから数えられない)

・ヨアケブシ(明けの明星)

「ヨアケブシ。魚の釣れるときと関係ない。時間がわかる」

・星と風

「星が全体にぴかぴかきらきらするとき風」(話者生年、昭和8年)

(5) 瀬戸内町西古見

尋ねても教えてくれる人いなかった。「見て習え」と言っただけで、年寄りが星を目標にしているのを見て、次のような星名知識を習得した。

・ブリブシ(プレアデス星団)

「星が固まって、ブリブシ。ブリブシは天気関係ない。ブリブシ、漁師が使っていた」

・ミツリブシ(オリオン座三つ星)

「ミツリブシ、3ついつもいっしょに出る。夜中ミツリブシ見た人はいない。かなしかな、かれしが海に出るとき見た」(話者生年、昭和15年)

(6) 瀬戸内町芝(加計呂麻島)

ブレブシ、マスガタブシを祖父、父親から聞いた。祖父が、マスガタブシここきているから何時と目標にしていた。

・ブレブシ(プレアデス星団)

「ブレブシ、星がいっぱいある。10ぐらい。固まるいうことを『ブレ』。ブレブシがどこきているから何時と、おおよそ検討ついた。マスガタブシよりブレブシで時間を知った」

・マスガタブシ(楯形星)(オリオン座三つ星と小三つ星とη星)

「マスガタブシ、楯の形して出てくる。それも旧の日数によって時間が異なる」(話者生年、大正15年)

(7)瀬戸内町諸鈍(加計呂麻島)

「かたれ」と言って、浜のほうで年寄りや兄さんからブリブシ、ミツブシ、ユーバンブシ、ヨアケブシ等の星名を聞いた。空がきれい、「夜中ミツブシヤ…」という歌も、子どもの頃、浜で夏、「かたれ」で年寄りから聞いた。

「かたれ」で教えてもらった歌を学校で歌ったり、ブリブシとか島口言ったら怒られた。次、方言という人がいるまで札を持たされた。ブリブシと言ったら方言の札を持たされた。

・ブリブシ(プレアデス星団)

「ブリブシ、昔は言いよった。ブリブシ、小さい」

・ミツブシ(オリオン座三つ星)

「ミツブシ大きい。同じ間隔。3つ同じ大きさ」

「八月踊りのなかに、『ヨーナカミツブシヤ、ミチャルチュウラヌ、ワヌガカナユエニ、ミチャル』。彼女を会いに行ったとき見た。8月は毎日踊ってよい」

・ユーバンブシ(夕飯星)(宵の明星)

「ユーバンブシ、夕飯(ユーバン)。夕方くらいになると、大きい星、ひとつの星、西の空に星出る。ユーバンブシ、8時、9時に入る。早い人6時にごはん食べる。そのときに出るからユーバンブシ」

・ヨアケブシ(夜明け星)(明けの明星)

「ヨアケブシ、東からあがってくる。ユーバンブシと同じような星。ユーバンブシとヨアケブシ、両方、毎日出る。山アテする。星は、気象と関係ない。星は、方角も目標にしなかった。昔、時間を、ヨアケブシで知った。5時頃、高くあがってますからね。星をめあてには、経験してない」(話者生年、昭和8年)

(8)瀬戸内町知之浦(加計呂麻島)

瀬戸内町知之浦出身で現在古仁屋在住の話者より、子どもの頃、瀬戸内町知之浦で年寄りから聞いて覚えた星名伝承を記録した。

・ナナツレブシ、ブレブシ、ブリブシ、ブリフシ(プレアデス星団)

「ナナツレブシ、固まっている。7つ固まっている。奄美はブレブシ、ブリブシ、ブリフシという。年上から教えてもらったのはナナツレブシ。7つ連れて。風も関係ない」

・ネノハウフシ(こぐま座α星(北極星))

「ネノハウフシ、全然動かない。だいたいそれでわかる。走らすときに、ネノハウフシ。動かない。目当てに走らす。ネノハウフシだけ相手にしても行方不明になる。羅針盤も相手にした」

「沖縄のまねして。糸満から来た人のまねをして、『夜

走(は)らす船はネノハウフシ目当てに、わになちやるうやは自分をめあてに生きていく』と歌う。沖縄はネノハウフシ。ここはネノハウフシ」

「ネノハウフシ、方向の目当て。船の目当て。曇ったら見えない。羅針盤あった。曇ったら、羅針盤目当て。晴れてても、北の方向走るにはネノハウフシ目当て。南の方へ走るには羅針盤目当て。羅針盤、今は度、昔は、子、丑、寅」

・マスカタフシ(楯形星)(おおぐま座αβγδεζη)

「マスカタフシ。米なんか量る柄のついた一升楯の形。北斗七星。マスカタフシ、北斗七星のこと。マスカタフシ、季節によってかわる。いまも見える。マスカタフシ見たことがある。ネノハウフシ、マスカタフシ、『フシ』と言う」

・フナカタフシ(船形星)(いて座の星?)

「フナカタフシ、南のほうにある、夏。冬は見えない。加計呂麻知之浦で子どもの頃、年寄りから伝え聞いた。見たことがない。船の形の星があったのだろう。帆のあるような形だろう」

・アサバンフシ(朝飯星)(明けの明星)

「昔は農作業。アサバンフシ見て、はよ(早)起きる。アサバンフシ。昔の人、時計ないから。あっても各集落に1つか2つか。いまは各自。アサバンフシ、時間知るのに役立つ」

・ユーバンフシ(夕飯星)(宵の明星)

「ユーバンフシ、夕飯(ゆうめし)、よいのうち西に沈むのがユーバンフシ」

(話者生年、昭和8年)

4. おわりに

(1)星の出と漁

北海道、東北に広く分布するイカ釣りの役星の伝承(石橋 1989)が長崎県対馬(北尾 2002)、壱岐(北尾 2011)においても伝承されていたが、2011年の調査で五島列島においても伝承されていることが明らかになった。

(2)南西諸島のプレアデス星団の星名

野尻抱影氏(1973)によると、奄美大島宇検においてブレブシが伝えられている。筆者もアンケート調査及び2001年の現地調査において、群れ星のグループの星名を記録しており、奄美大島・喜界島より南においては群れ星のグループ、トカラ列島以北はスバルのグループの星名が伝えられていると考えていた。しかし、2011年の調査により、次のように2箇所において、群れ星のグループ以外の星名「ナナツブシ」「ナナツレブシ」が伝えられていることが明らかになった。(図参照)

・鹿児島県奄美市名瀬小湊…ナナツブシ

・鹿児島県大島郡瀬戸内町知之浦…ナナツレブシ

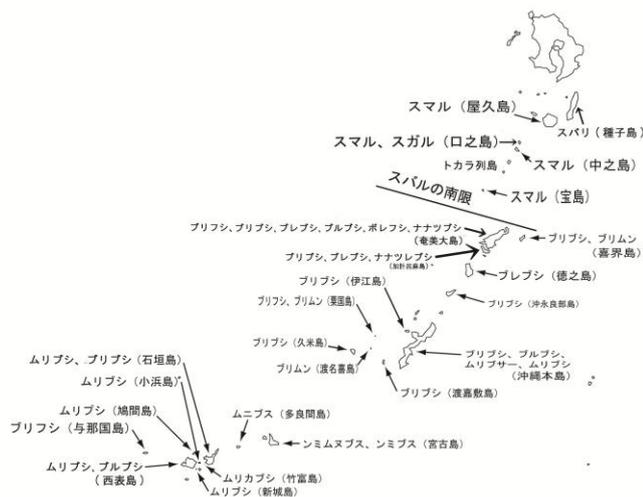


図 南西諸島のプレアデス星団の星名
(奄美大島・加計呂麻島においては、群れ星のグループとともに、七つ星のグループが伝えられていた)

(3) 星座名の多様性

生活のなかで様々な星座を創造し、世代をこえて多様で豊かな星名が伝承された。たとえば、鹿児島県大島郡瀬戸内町知之浦(話者は古仁屋在住)の場合、次のように「数」「生活の身近に存在するもの」「生活の様々な場面」「方角」等の広い領域にわたって多様な星名が伝承されていた。

数に関する星名

数に関する星名は、次の2種である。

- ・ミツブシ(オリオン座三つ星)
- ・ナナツレブシ(プレアデス星団)(七連れ星)(7つかたまっている。7つ連れて)

生活の身近に存在するものに関する星名

生活に身近な「一升榼」や「船」の形を星空に描いた。

- ・マスカタフシ(おおぐま座 $\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta$)(榼形星)(米等を量る柄のついた一升榼の形)
- ・フナカタフシ(いて座の星?)(船形星)

生活の様々な場面に関する星名

生活の様々な場面が星名となった。夕食、朝食の場面も、星名と結びついた。

- ・ユーバンフシ(宵の明星)(夕飯星)
- ・アサバンフシ(明けの明星)(朝飯星)

方角に関する星名

十二支での真北「子」が星名となった。

- ・ネノハウフシ(北極星(こぐま座 α 星))

(4) 新たに記録できた星名

次のような『日本の星』『日本星名辞典』『星の方言と民俗』に掲載されていない星名を記録することができ

た。

奄美大島

- ・イコブシ(奄美市名瀬小湊)(おおぐま座 $\alpha \beta \gamma$)
さそり座アンタレスと $\sigma \tau$ ではなく、北斗七星の一部を意味する特筆すべき星名。
- ・ツガフシ(奄美市笠利町笠利)(オリオン座三つ星と小三つ星と η 星)
井戸にあるような榼に見立てた星名。

五島列島

- ・ニシヒカリ(新上五島町日島郷)(宵の明星)
宵の明星が西の空に光っていることからニシヒカリ(西光り)。
- ・キタノネノヒツボシ(新上五島町桐古里郷横瀬)(こぐま座 α 星(北極星))
キタノネノホシ、ヒツボシという呼び方は広く分布するが、キタノネノホシとヒツボシが合わさった特筆すべき星名。
- ・ヨアケノイチバンボシ(明けの明星)(五島市奈留町泊東風泊)
一般的に宵の明星を意味するイチバンボシが、明けの明星を意味する。

参考文献

野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版
石橋正:1989, 乾杯! 海の男たち, 成山堂書店
北尾浩一:2002, 星の語り部, ウインかもがわ
北尾浩一:2011, 大阪市立科学館研究報告2011年, 大阪市立科学館, 45-50